

<研究ノート>

ドイツ金融資本とアメリカ金融資本主義の基本考察

— 〈株式資本と金融市場〉視角と金融資本主義の源流—

坂 本 正

目 次

はじめに

1. 金融資本の2つの規定と方法論
2. 利子うみ資本理論と貨幣資本優位の信用論の展開
3. 金融市場論の2つの展開
4. 金融資本から金融資本主義への展開
結びに代えて

はじめに

現代の日本をはじめとする先進資本主義の展開は、金融市場優位の国際規模で展開する金融資本主義の展開と言ってよい、だが、それは金融危機を引き起こしその事後的な銀行制度救済と市場救済は国家＝政府による市場再生として復興されるのが現代金融危機救済の特徴でそれは国家市場経済と呼ばれるべきものであった。この新たな資本主義の展開と国家市場経済の出現は、市場経済の発展と市場機能の拡大なのか、それとも国家＝政府による市場機能の衰退なのか、という新たな問題を我々に提起している。その考察を理論的に行うためには、現代における金融恐慌の発現形態の特質と国家市場経済の関係性を明らかにする必要があるが、他面でなぜ制御不能に

なるまでに金融資本主義が展開してきたのかを考察する必要があるであろう。この観点から資本主義発展の新たな資本段階を画した金融資本の展開の中で独占資本主義を支え独自の展開を遂げた金融資本主義という金融市場優位の資本主義構造の特質を金融資本構造との関連で、考察することにした。金融資本については多様な分析がなされ、多くの実証研究の積み重ねがあるが、金融資本と金融資本主義との関連についてその示唆となる視点を提示したものは少ない。本稿ではヒルファディング『金融資本論』(1910)の提起した金融資本分析の視点と金融資本を導出するために構想した理論構造に着目し、彼が強調した〈株式資本と金融市場〉視角と金融資本主義との関連を考察することにした¹⁾。

1 金融資本の二つの規定と方法論

ヒルファディング『金融資本論』はその序文で金融資本の規定を提示しそれを導出する上向法としての方法論を明らかにした。それは資本の集中とカルテル・トラストの独占形成と銀行と産業の緊密化が、「最も高度なかつ最も抽象的な現象形態」としての金融資本を生み出すというのである。これは有名なヒルファディングの金融資本分析の指針であり、彼のこみいった複合的な理論体系を解くカギとなるも

1) 現代の国家市場経済と金融資本の関係、および金融資本主義についての考察については、坂本 正・倉向陽『サブプライム金融危機と国家市場経済』第8章「国家市場経済下での銀行危機と金融支配問題」蒼天社出版、2019、参照。また、ヒルファディング『金融資本論』(1910)については、cf. Rudolf Hilferding, *Das Finanz Kapital*, [Marx-Studien] Verlag Der Wiener Volksbuchhandlung Ignaz Brad& Co., 1910, 邦訳：ヒルファディング・岡崎次郎、『金融資本論(上)』(岩波文庫)、1955 [1976]年、参照。

のであり、独占論と「銀行と産業の緊密化」論の相互関係をどう考察するかが研究者の間で争点となってきた。だが、それに対してほとんど触れられることがなく分析視角の観点から重要な方法論として取り扱われることがなかった問題がここに提示されている。それは、ヒルファディングが金融資本を最も強く特徴づけた「最も高度なかつ最も抽象的な現象形態」が何を意味するのか、という点である。

通常想定されてきたヒルファディング「金融資本」とは「銀行による産業支配」を内実とするもので明らかに優れて具体的であり、それゆえ衝撃的なインパクトを与え鮮明なイメージで定着してきたが、反面その具体性が厳しい批判を呼び起こすことになった。つまり、「金融資本」とは前者の産業独占と銀行と産業の緊密化の組み合わせで本論において詳細に展開されて確定されるもので、それは「銀行による産業支配」を内実とするものであった。しかし、だとすればこの具体的な「銀行による産業支配」構造をなぜ後者の「最も高度なかつ最も抽象的な現象形態」と呼ぶのか、これはヒルファディング研究者を長く悩ませてきた論点である。

第一は、その解決策としてとりあえずその文言を枕詞的に扱い特にその関連性に言及しないか、実質の規定に際してはあえて触れず事実上無視するという姿勢である。

第二は、少し踏み込んで文字通りこれを資本の物神化と捉え、資本の物神性論として付加的にその意義を説明することである。しかし資本の物神性を強調するとそれは逆に現実世界の実質論とはかけ離れることになり、実態としての「銀行による産業支配」との関連性がますます希薄になってしまう。つまり資本主義における資本の本質に物神性があるという何か危うい実体なき意識の倒錯性がイメージされると「銀行による産業支配」という現実分析へのアプローチとの乖離があまりにも大きすぎて、なぜ考察の基本命題にこの抽象規定を置き最も高度な現象と捉えたのかは依然として不明なままである。高度な資本主義の発展がこれまで資本主義発展を側面で支えてきた銀行の役割を大きく転換させ貨幣資本と産業資本の関係を転倒させるという新たな資本関係の

倒錯性を資本の物神性の新たな極地であるとして表現したとも理解できるが、それでは資本の物神性と「銀行による産業支配」実態との乖離を埋めるものではなく、「銀行による産業支配」実態を資本の物神性の倒錯性の極致として強調したものに過ぎなくなる。つまり、これは「最も高度なかつ最も抽象的な現象形態」を「銀行による産業支配」分析に際しては何ら関与するものではなく、その結論としての倒錯した複雑な「金融資本」構造を資本の物神性の極致として強調するものとして捉える視点である。したがって相互規定は分析における関連ははなはだ乏しくむしろ乖離していなければならないほどその目的を達することになるものであった。これは、序言での「最も高度なかつ最も抽象的な現象形態」は「金融資本」実態との乖離にこそ強調点があり、そこにこそ資本主義高度化の本質を見るという立場である。

第三は、それに対して、この「最も高度なかつ最も抽象的な現象形態」を具体的には貨幣資本として捉え貨幣資本の運動としての現実的な展開がより高度な貨幣資本形態へと転換され、それが「金融資本」として帰結したものという立場である。筆者はこの第三の視点を〈貨幣資本視角の「金融資本」〉と規定する。この視点は高度な資本主義の展開を貨幣資本視点から考察することで導出される「金融資本」を「最も高度なかつ抽象的な現象形態」と位置付けるが、それはその資本の物神性を強調するためだけではなく、具体的な実在としての「銀行による産業支配」を導出するための分析ツールとして積極的に捉えるものなのである。つまり、「金融資本」は貨幣資本の展開としては「最も高度なかつ抽象的な現象形態」であり、現実の実在としては「銀行による産業支配」の「金融資本」形態をとるのである。ここにヒルファディングが含意する「高度で抽象的な」貨幣資本形態が規定された根拠がある。貨幣資本は資本主義の発展につれてその機能と役割を大きく変化させ、資本の集中＝集積にも大きな役割を果たすようになる。ヒルファディングが強調するのはこの貨幣資本の機能変化でありそれによって生み出された実在としての「金融資本」である。これこそがヒルファディングが読者に序言で喚起した2つの「金融資本」規定に向けた分析指針であり結論であ

る。では、なぜこの2つの「金融資本」規定が必要なのか、ヒルファディングが序言で強く読者に注意を喚起しながらこれまでなぜこの視点が看過されてきたのか、それを検討したい。

この序言の「最も高度なかつ最も抽象的な現象形態」について、松井安信氏は〈金融資本の本質規定(資本物神の最高形態としての金融資本)であり、「彼の金融資本規定の基軸はマルクスの株式会社論の抽象的・本質的規定の現実化」である〉として、〈資本物神の最高形態としての金融資本の規定が株式会社の抽象的・本質的規定の現実化〉を強調したのである²⁾。松井氏のマルクスの株式会社での資本物神論を受けてヒルファディングが彼独自の株式会社論を展開したが「金融資本」はそこでのより具体化された株式会社の抽象的・本質的規定の現実化であるという主張は、マルクス株式会社の資本物神をヒルファディング株式会社論の資本物神への理論継承の系譜で論じたもので、マルクスからヒルファディングへの株式会社の資本物神の共通性に着目するあまり、株式会社を基軸とする金融資本を資本物神と規定したものになっている。氏の「金融資本」規定では現実の実態としての「銀行による産業支配」は資本の物神性とは何らかかわりのないものになってしまっているのである。多くの論者が「銀行による産業支配」について論評する際に資本物神規定に言及しないのはこの裏返しの理由があったとみるべきであろう。というのも資本の物神性規定に着目すれば、マルクス株式会社の資本物神が到達点であり、それを尊重すれば、ヒルファディングがいかに具体的に株式会社の理論を展開してそれが金融資本形成に大きな役割を果たしたとしても金融資本の中軸概念としての株式会社が資本物神を代表するものであり、実態としての「銀行による産業支配」ではなく、資本物神としての株式会社が金融資本と規定されるためである。本来資本物神と金融資本が論理次元で乖離するものとして論じていても具体像として資本物神が株式会社に金融資本が「銀行による産業支配」

では大きく異なることになりこの乖離は大きな論理矛盾となってしまうのである。確かにマルクスの株式会社論は彼の理論体系内での最高の到達点であり資本物神を代表するものであったが、ヒルファディングの場合はマルクスの株式会社論をさらに高度資本主義の重要な分析装置として位置づけその分析ツールとして株式資本=擬制資本の役割を考察しているのであるから、マルクス株式会社論の株式資本・擬制資本を資本物神と規定したマルクスの資本物神視点をそのままヒルファディングの「金融資本」の物神性規定と無媒介的の直結・結合させるべきではないのである。

中田常男氏は、〈金融資本こそは『資本の最高の、かつ最も抽象的な現象形態をなすもの』—資本物神の最高の形態—であり、それ自体『最近の資本主義的発展の経済的諸現象』の特徴を集約的に表現するもの〉であるとして、〈ここでは、金融資本が資本関係の最高次元の形態をなすものであり、それ故にこの論理段階にあっては、金融資本において資本物神は最高の形態を示し、そのことによって『最も見通し難いもの』となる。すなわち、反射したもの—事実関係の最高次元の転倒性を示すもの—に過ぎないにもかかわらず、それがこの論理段階における支配資本としての金融資本の特有の運動を形成・展開し、現在の経済的諸形態を基本的に特徴づけるものとなっている〉と詳細に説明した³⁾。

難解な説明だが、金融資本が資本物神の最高の形態であるのはその通りであるが、これは事実関係を転倒させたもので、これによってこの論理段階の金融資本の特有の運動と経済諸関係を特徴づけると規定している、のだとすれば、問題はその特有の運動は何かという点である。

ヒルファディングは、マルクスの株式会社・株式資本論での資本の物神性を継承したが、それは金融資本を株式会社・株式資本で完結させそこに資本の物神性を見るのではなく、その継承上に更に金融資本の論理段階に特有の運動を規定するというこ

2) 坂本 正「金融革新と金融資本—金融資本主義と『金融資本論』の中央銀行支配—」『海外事情研究』2023年3月、57頁。

3) 同上、57頁。

ある。筆者はそれを「抽象形態としての金融資本」と把握し、第15章での総括規定での金融資本範疇を「金融資本の無概念的な形態」と位置付けた。それはそこでヒルファディングが金融資本を明確に貨幣資本と規定し、貨幣資本の運動が資本運動の最も無概念的な形態であると断言したうえで、金融資本の形成に向けては、貸付資本・擬制資本、それを媒介する銀行がその多くを自己の資本に転嫁することで金融資本には銀行資本の形態が与えられ、銀行資本は現実資本に機能する産業資本の貨幣形態になると規定したからである⁴⁾。これは「銀行による産業支配」の実体をなす銀行資本の現実資本化への資本の融合状況を貨幣形態として表現したもので、金融資本が銀行資本と産業資本の合一化という資本の実体を貨幣資本の運動にとらえ、それは産業資本において貨幣として現れて資本機能を果たすというのである。確かに貨幣資本と貨幣に還元化されると金融資本は抽象的規定に凝縮され、資本運動として一般的で無概念化されてしまうが、それは金融資本の実体が貨幣資本であることでマルクス株式会社・株式資本での資本の物神性をさらに極限的に昇華させた極致としての資本の物神性表現であったのである。

これはヒルファディングがマルクスから継承した資本物神視点をさらなる資本物神への高みへと引き上げたことを示すヒルファディングの自負の表現であった。

当然のことだが、金融資本を貨幣資本と実体説明をしたところで金融資本の特質は何ら明らかにはならない。金融資本は現実の実態としては独占を基礎

にした「銀行による産業支配」であるが、その金融資本の特質は究極には貨幣資本に還元され、そのことで逆に資本物神の新たな極致へと架空化されるのである。ヒルファディングにとってマルクスが想定していなかった高度な資本主義はマルクスの方法論を更に論理的に展開させその結果導き出されたその新たな資本段階はさらなる資本物神を表現するものでなければならなかった。序言での「抽象的な現象としての金融資本」と現実の実態を表現する「銀行による産業支配」としての金融資本は共にヒルファディングが目指した「金融資本」表現であったのである。そして、「抽象的な現象としての金融資本」は〈実体としての貨幣資本〉が展開された金融資本現象であり、そこに至る展開は貨幣資本視点から導出されるべきもので、ここにヒルファディングの金融資本分析の起点と結論が凝縮されているのである。そしてその視点から導出されるべき現状分析としての「銀行による産業支配」構造をいかに理論構成するか、その具体的な上向分析が指示されたのである。それが「銀行による産業支配」構造の具体的な現状分析や銀行と産業の融合＝癒着の歴史的傾向についての詳細な実証分析ではなく、貨幣からの上向分析手法をとったのは金融資本が貨幣資本現象であり、独占形成を基礎にしたうえでなお独占形成を媒介にした「銀行による産業支配」という産業資本に対する銀行資本の優位構造、つまり〈貨幣資本優位のいわば転倒した貨幣資本現象〉が起きていてそれらを総合的に理論分析しなければならなかったからである。

4) 同上、58頁。ヒルファディング批判の論者からの質問は、金融資本が資本であるならば、資本の運動とは何かという点で、貨幣資本の運動を示すとそれは貨幣資本の運動で新たな金融資本の運動ではないので金融資本は資本ではないのだから金融資本というべきではないという反論がされる。その論でいえば銀行資本は運動としては貨幣資本の運動で銀行資本と呼ぶべきではないし、独占資本は資本として特有な運動形態を示すものではないので独占資本と呼ぶべきものではなくなる。金融資本の資本規定への疑念は当然の問題というべきだが、その答えはヒルファディング自身の規定では実体は銀行資本であり、貨幣資本なのである。しかし金融資本を銀行資本と規定すれば、銀行資本が実体では独占が表現できないので本来独占を主張すべきで、金融資本よりも独占段階を強調すべきだという主流派の見解は段階認識としては正しいがその独占を形成する資本の集中＝集積視角では銀行の融合＝癒着の現象を析出できない。それは独占段階に適合した独占的な銀行による独占的な融合＝癒着が付け加えられる論理構造なのである。時代認識としての段階区分と実態認識の指標は必要でその観点からの分析は重要だが、その独占認識重視の段階区分視点からヒルファディング金融資本分析の論理構成そのものを全否定すべきではないのである。

つまり序言で示されたこの2つの金融資本はヒルファディング金融資本論が念頭において析出する課題であると同時にその分析に向けての方法論であったのである。

2 利子うみ資本理論と貨幣資本優位の信用論の展開

ヒルファディング信用論は、マルクスの分析手法に従って商業信用から銀行信用への展開をベースに金融資本への考察を開始するにあたって、従来のこの2つの信用範疇では金融資本への接近方法としては不十分だということは明らかであった。金融資本の構成要因として固定資本の増大に対応する銀行の供与方法、株式会社を用いた企業の資本調達方法を信用制度の発展段階としてどう展開するのか、株式会社の資本調達を支えるメカニズムとはどういふものか、個人銀行から株式会社への組織転換と銀行との関係にどのような意味があるのか、銀行は個人企業の貸し付けを行うがその回収には時間がかかる。もしその貸し付けを出資に転換して上場の際に回収すればそれは容易にされる。しかもその上場に伴う発行市場で株式に価格が付くとすればそこで形成される株式資本は擬制資本で、それはマルクス体系の資本物神の論理段階ではない。まさにそれは金融資本を形成するための実在のいわば実態としての株式会社・株式資本であり、その現状分析を行うための株式会社・株式資本の理論化であって抽象化された資本物神の形態ではなかった。これらは産業独占の形成に役立つ信用制度の構造変化で、これらの課題を果たすには商業信用から銀行信用の分析手法では射程が届くはずもなく、その射程拡大に向けた新たな信用範疇が必要になったのである。

それは信用理論研究において、商業信用から銀行信用の延長上に資本信用を設定するとか、銀行信用の延長上に新たな論理段階から擬制資本信用を提起するとか、の議論が展開されたし、信用制度の発展と株式会社との関係について「信用制度と株式会社」あるいは「株式会社と信用制度」をテーマにおびただしい論争も展開された。その後そのレベルからの新たな論争や問題提起はなされてきていない。これ

らからヒルファディングが分析の射程拡大のために新たな信用範疇を措定したことは当然の帰結であったというべきであろう。そしてそれ以上に現在からみた金融資本段階の構造的特質は何か、それは現在の資本主義経済との関係は何かが問われなければならないのである。

このように分析課題を定めそれらの課題に接近するためにどのように分析視角を定めるのか。我々はすでに明らかにしてきたように、金融資本の資本実体は貨幣資本であり、この貨幣資本を軸に分析をどう展開することができるのか、これが基本問題であった。「抽象的な金融資本」規定は金融資本分析の基本的な分析視点にかかわる問題であったのである。

その議論の出発点としてヒルファディングが貨幣・信用問題に取り込む姿勢は、このように示された。「この道を行けば、かの資本主義的信用として遂には社会的諸事象を支配するに至る力が、いかにして流通事象そのものから成長するか、の秘密を追跡するという希望」(S. 56, 訳 95 頁)があるとしてこの問題に忍耐強く取り組むことを読者に求めた。

ヒルファディングは独自の「流通信用」「資本信用」範疇の析出にあたって信用論展開のベースにあったのはマルクスの商業信用から銀行信用への展開であった。ヒルファディングは商業信用から銀行信用への信用の展開を銀行業者が手形を買うことで「銀行業者は商業信用に銀行信用—彼自身の信用—を代置する。」(S. 79, 訳 126 頁)「手形と引き換えに銀行券を与えることによって、産業手形および商業手形に彼〔銀行〕自身の手形を代置する」(S. 79, 訳 126 頁)そして「銀行業が発達してすべての遊休貨幣が銀行に流入するようになるとともに銀行信用が商業信用に代わる」(S. 83, 訳 132 頁)かくて「銀行業者は彼自身の信用をもって手形に代えるのだから、信用を必要とするが、しかし彼の支払い能力の保証源としてただ僅少な貨幣形態における自己資本を必要とするにすぎない」(S. 83, 訳 132 頁)

つまり、商業信用から銀行信用への展開は手形流通を基礎に銀行が手形を銀行券(この場合は兌換銀行券)で買い取るという手形割引によって行われ、手形流通に代わって銀行券が流通することで流通範

囲も広がり、銀行による決済が進むことで現金が節約される社会的効果を強調する。そしてその前提になる手形流通について生産的資本家自身が相互に行う信用が流通信用でここでの貨幣節約は資本家にとっての貨幣資本節約という貨幣と貨幣資本節約を両面で論じたのである。

しかしこの商業信用と銀行信用の考察範囲からは金融資本分析への射程が届かない。なぜなら銀行信用は商業信用の代位であり、銀行信用の拡大によってその流通の範囲は拡大され銀行が措定されて銀行による決済の拡大が高い経済効果を上げて資本の集中=集積につながるような資本の規模拡大に寄与する銀行機能を抽出することができないからである。商業信用から銀行信用への信用代位とそこで措定された銀行がこれまでの信用範疇とは異なる銀行機能を析出することがヒルファディングの課題であり、利子うみ資本の担い手としての銀行が新たな機能を獲得する契機についても資本の循環過程から析出しその機能を銀行が取り込むという論理構成で銀行の役割を再規定しそれを「資本信用」範疇で総括しようとしたのである。

その新たな信用範疇に向けての信用論の展開でヒルファディングは「第三章 支払手段としての貨幣。信用貨幣」「産業資本の流通における貨幣」での信用分析で商品流通での信用と産業資本の循環過程での信用機能を考察し、信用による遊休貨幣資本の機能貨幣資本への転化という産業発展の契機を析出する。そして「第五章 銀行と産業資本」で信用制度論としての展開と金融資本形成につながる基本要因の析出を行う。だがそれは金融資本への可能的要因でその後の金融市場論、独占形成論によって現実的な金融資本へと転じるのである。その枠組みで第五章では貨幣の支払い手段としての単純な機能変化について資本循環のプロセスに即して貨幣節約と生産的資本家相互の視点から貨幣資本節約から説き起こし (S. 76, 訳 121-122 頁)、この生産資本家相互の信用を流通信用と名付けた (S. 77, 訳 122-123 頁)。彼はこの視点から流通信用を次のように説明した。「手形信用は流通期間中保持されなければならない追加資本に代位する。この流通信用を生産的資本家たちは自ら互に与えあう。」 (S. 78, 訳 125 頁) この規定

から明らかなようにヒルファディングは資本循環の〈流通期間中の手形信用〉を生産資本家の追加資本節約の観点から「流通信用」と名付けたが、この生産資本家の観点から見れば銀行による手形割引も銀行による信用代位なので「流通信用」である。この観点から遊休貨幣資本の機能貨幣資本への転化が果たす銀行機能に生産拡張に着目し〈貨幣の節約ではなく貨幣の移転〉としての貨幣資本の機能資本への移転を新たな信用範疇と規定した。「資本信用とは、移転によって遊休貨幣資本から機能貨幣資本に転化されるべき貨幣の転移である。」 (SS. 86-87, 訳 137 頁)

あくまでもヒルファディングが追及しようとする信用範疇は資本の循環過程に即した信用範疇の析出で単純な商品流通段階での貨幣の単純な機能変化も生産的資本家の見地から見直すのであり、この生産的資本家からの視点から、資本循環からの遊休貨幣資本の析出が資本信用を生み出すが銀行がこの機能を取り込む以前の可能性として生産的資本家が手元の遊休貨幣資本を一時的に貸し出すことで貨幣資本 (貸付資本) 家になることが指摘された (S. 87, 訳 38 頁)。生産資本家相互に融通しあう関係から貨幣資本家が定義されたことに留意すべきである。資本信用は利子うみ資本論として提起され銀行が資本信用を担い拡大させることが、ヒルファディングの再生産と信用の観点でありこの利子うみ資本を基軸にした金融資本論への分析が展開されるのである。利子うみ資本・資本信用から金融市場論への展開が商業銀行から兼営銀行への構造変化を考察し新たな信用制度論への地平を切り開くことになるが、ヒルファディングの原論的な理論展開と現状分析を組み合わせた意義は金融市場論に現れる。その彼特有の分析視角が当時想定されていなかった金融資本主義との理論的接点を析出することになったのである。

3 金融市場論の2つの展開

ヒルファディングは第7章「株式会社」、第8章「証券取引所」で株式資本、擬制資本を理論的に考察した。これは、金融資本の構成上、いわば中枢的な骨格をなす要の理論部分をなすもので、信用制度

論の展開上では金融市場に位置するものであった。ヒルファディングはマルクスの株式会社・株式資本＝擬制資本の体系を締めくくる資本物神論を理論の要に据えて、これを単なる資本物神としてではなく更なる資本物神に向けた分析の起点として新たな上向法で金融資本を析出しようとした。これは〈株式資本と金融市場〉視角である。この観点から筆者のヒルファディング研究は以下のようにこの2つの章を中心に開始された。①「ヒルファディング証券市場論と産業支配の構造」『証券経済学会年報』第11号、1976年、②『金融資本論』の基本構成—金融資本と金融市場(1)—『経済論究』第38号、九州大学大学院、1976年、③「ヒルファディング「独占形成論」論の構造—金融資本と金融市場(2)—」『経済論究』第39号、九州大学大学院、1977年、④「金融市場論の理論展開—『金融資本論』を中心に—」『証券経済学会年報』第12号、1977年。

これらの論考から明らかなように、「銀行による産業支配」の支配論への契機を証券市場経由で分析し、金融市場の観点から金融資本の基本構成を検討し、金融市場が独占形成に果たす役割を検討した。つまり、ここで示された〈株式資本と金融市場〉視角が金融資本分析の基礎視角であった。これはこれまで検討し言及してきた序言の中での「抽象的な金融資本」に対応する方法論の具体化といってよいであろう。

この〈株式資本と金融市場〉を構成するヒルファディング体系は章別に異なる内容となっているが、株式会社論は原理論的な分析で構成され、証券取引所論は具体的な現状分析に主眼を置き、その制度的な機能を考察している。いうまでもなく証券取引所は株式市場＝擬制資本市場の展開の場で、金融市場論的にはここでの原理規定が金融市場の在り方を決めるはずのものであるが、原理規定は株式会社論で詳細に展開されたため編別構成上では金融市場の狭隘性と銀行による証券取引所の取り込み化が中心で、このことによってドイツ金融資本の歴史的な構造的な特質が明らかにされたのである。つまり、ヒルファディング金融市場論は株式会社論での原理規定と証券取引所論での制度論・現状分析とで成り立っていたのである。

この証券取引所論での現状分析論はドイツ金融資本を特徴づけるものであったがそれは株式会社論の原理規定と大きく異なるものであった。筆者がヒルファディング金融資本論研究を〈株式市場と金融市場〉に据えたのは、イギリス、ドイツ、アメリカの金融資本の違いは独占の程度、支配の程度によって大きく異なるがその違いを決定づけているのが金融市場の違いであること注目していたからであった。ヒルファディング金融資本の理論構成の特徴は、原理論と現状分析の組み合わせで組み立てられていることであった。この2つの金融市場論はその組み合わせを端的に示すものであったのである。

4 金融資本から金融資本主義への展開と理論の二重性

ヒルファディングがモデルとしたドイツ型金融資本が「銀行による産業支配」を構造的特質にするのに対してアメリカ型の金融資本は金融市場優位構造の下での「投資銀行による産業支配」を構造的特質としていた。金融資本研究は各国の金融資本構造を詳細に分析してきたが、それらの業績から共通の金融資本概念を抽出するのは簡単なことではない。独占の程度もカルテル、トラスト、コンツェルンと様々に異なるうえ、信用制度も商業銀行を基軸に銀行間の短期金融市場(割引市場)で構成されるイギリスの場合だと産業独占もそれほど規模が巨大ではなく銀行との関係もそれほど強固ではない。つまり短期金融市場と株式市場の金融市場を軸とした資金経路レベルでの緩やかな関連と支配性の観点からその金融資本形態の内実が検討されることになる。自由主義経済での典型的な資本主義モデルとなるイギリス資本主義は金融資本への移行に際しては市場モデルをベースにした緩やかな高度資本主義を形成するのである。だが後発のドイツ、アメリカは十分に発展した短期金融市場(貨幣市場)をもつことなく金融市場の発展もイギリスとは乖離した発展を遂げることになる。ドイツは銀行が制度全体の機能として短期市場を銀行間市場に取り込み、銀行優位の発展を遂げるようになった。それに対してアメリカは商業銀行の発展による産業への資金供給機能が十分ではなく、企業は証券・株式市場の肥大化を通じて資金

を獲得する。ドイツが固定資本の巨大化要請に対応するため銀行が証券業務を兼営化する兼営銀行へと構造変化を遂げるのに対してアメリカは証券取り引き業者としての投資銀行がその資金供給の役割を担うのである。投資銀行は商業銀行とのシンジケートを編成しその頂点に位置することで産業との資金的な連携を強め産業支配傾向を強めるのである。投資銀行は株式の引き受け発行業務を通じた創業者利得を富の源泉として肥大化する証券市場を支配し産業を支配するのである。この「投資銀行による産業支配」はドイツとは対極の発展を遂げるが、それが金融資本主義と呼ばれる金融市場優位型の資本主義の発展である。

この比較においてドイツとアメリカの金融資本の発展形態は異質で、ましてアメリカ型の金融資本主義の展開はヒルファディング金融資本論とは異質に見えるが決してそうではない。ヒルファディングは貨幣資本優位の視点から信用制度論を展開し独占論を媒介にして金融資本を析出したがその分析視角が重要である。金融資本主義とはまさに金融市場優位の下で投資銀行優位の視点から分析されるものであり、まさに産業独占を媒介にした貨幣資本優位の視点から導出される金融資本の発展形態であるからである。

ヒルファディング金融資本は貨幣資本優位の理論構成に収斂される手法をとってその〈貨幣資本優位を貨幣資本支配に再編成〉している点に特徴がある。論理必然性の展開過程を強調してはいてもその内実は〈支配の契機〉をどのように組み込むかが必要であった。それはドイツ型の「銀行による産業支配」導出に必須の視点でその視点から、兼営銀行による証券市場支配、金融市場支配の側面が強調されることになった。この〈支配の契機〉をどのように評価すべきかは重要な論点である。ヒルファディングの「銀行による産業支配」はその後もドイツ銀行制度の構造的性質として理解されてきたからである。だが、ここで留意すべき点はヒルファディングの原論的な問題把握の確かさであり卓越した分析力の高さである。彼の把握したドイツの金融市場の現状では金融市場の規模は狭隘で機能も十分なものは言えなかったはずである。したがってその現状分

析は銀行の金融市場支配の現実を叙述することで十分でその特質を論理的に整序すればよかつたはずである。個人企業が多く巨大企業化していてもその実質は個人企業であることから株式市場も十全な機能を果たしてはいなかった。しかしヒルファディング株式会社論、株式市場論は市場機能を十全に果たしている理論上の体系と装置の中で析出され、その原理的展開の下で現実接近させるアプローチが「支配の契機」であったのである。原理的な理論を現実接近させることが現状分析への必須要件でその「支配の契機」で二次的に加工された〈貨幣資本優位に基づく貨幣資本支配〉論の展開が「銀行による産業支配」論の基軸に据えられることになったのである。我々はこのヒルファディングの原理的な理論把握の視点でヒルファディングの編別構成で展開される理論の二重性、すなわち原論的に把握され展開される原理論と「支配の契機」で二次的に加工された現状分析論の構造を理解すべきなのである。

ヒルファディング株式会社論は株式資本＝擬制資本の原理的規定を株式会社の資本調達機構と株式所有による株式支配のメカニズムを解明し、企業者利得を資本還元した創業者利得を析出した。短期の貨幣資本を繋いだ株式の流通市場を前提に発行市場で創出される企業者利得が略奪利得ではなく正常な株式会社組織での適正な経済学的範疇であることを解明し、これらから株式会社組織の活用によって固定資本の増大に対応した商業銀行から兼営銀行への移行＝転換、銀行が長期貸付を行っても貸し付けを株式出資に転換しその株式を売却して貸付額を回収するだけでなく、創業者利得をも取得しそれを自己資本の増強に充てることで自己資本を担保にしたさらなる長期貸付が可能になるメカニズムを提示した。その意味で株式会社論はまさに金融資本形成にとって基軸的な役割を果たすが、この具体的な信用機構の構造変革装置は「金融資本」が想定する資本物神の形態ではないことは明らかであろう。

この銀行といっても商業銀行ではない兼営銀行が長期貸付一回収・創業者利得取得による自己資本の充実—長期貸付を繰り返すことで銀行の巨大化・独占化の傾向が生まれ、銀行は産業の巨大化を促進するとともにその独占化を仲介するのである。この理

論装置はドイツの現状の背後にある原理的議論を析出しそれをベースに展開したもので実情に合わないとしてもそれはドイツの市場問題の限界を示すものに過ぎない。そこで現状分析として銀行による証券市場＝金融市場支配と証券取引所の取り込み化を歴史的傾向として描出しそこに「支配の契機」を埋め込むのである。

この原理規定としての株式会社・株式資本＝擬制資本の展開と信用制度の構造変化論はドイツだけでなくアメリカにも妥当する理論構成となっている。この理論装置で「投資銀行による産業支配」構造はアメリカ型金融資本である。多くのすぐれたアメリカ金融資本の理論分析が優れた業績として積み重ねられてきたが、ヒルファディングが提起したこの原理規定としての株式会社・株式資本＝擬制資本視角から金融資本を考察したものは見当たらない。この株式会社・株式資本＝擬制資本視角を信用制度展開の金融市場視点として見直したものが、〈株式資本と金融市場〉視角である。これがヒルファディングの金融資本分析の中軸視角であった。この視角から独占を媒介に金融資本が形成されるが、金融市場優位のアメリカでは投資銀行と商業銀行との対抗関係から投資銀行主導の金融資本を作り出すがこれを契機に金融資本主義への展開を遂げていく。金融資本主義は金融資本を基礎に金融市場優位の構造に即した独自の発展を示すが、この資本形態がアメリカ独自の形態をとるのは他に追従を許さないアメリカの世界的に優越な金融市場の広さと深さのためであり、国際的な金融市場の展開の中で金融機関と産業の個

別の支配関係を重視するのではなく金融市場の展開を支える投資銀行・商業銀行を軸にした種々金融機関の総合力が経済に与える影響力が問題となってくる。

結びに代えて

金融資本と金融資本主義は発展の時期とその構成内容が大きく異なることから関連付けて理論的考察がされることが少ないが、金融資本と金融資本主義は密接な関連がある。その共通項は金融市場の在り方でありそのかわり方が金融資本の在り方と金融資本主義の展開の程度を決定するといつてよい。この関連を明らかにするのがヒルファディング金融資本分析が提示した〈株式資本と金融市場〉視角である。金融資本主義として典型的な発展を遂げてきたアメリカの金融資本主義が示すように、証券市場肥大化が強い金融資本は証券市場・金融市場優位型の発展を遂げ、投資銀行が支配する金融市場の急成長とともに投資銀行業務を軸として関連金融機関との連携で金融市場優位の展開を遂げてきた。金融資本主義は金融資本を継承し市場優位型の派生形態として展開してきた。我々はヒルファディング金融資本論の現状分析的視点からの銀行による金融市場取り込み化傾向の視点から金融資本と金融市場の関係をみるのではなく、原理規定での金融資本と金融市場の関係を把握しその系譜上に金融資本主義の展開をみるべきなのである。